

小さな人生論より

古田土 満

この本は、致知出版社の社長・藤尾秀昭氏の書かれた本である。同氏とは、^{（株）}ウィンローダー様の会合で二度ほどお会いしているため、その人となり^が多少は理解しているため、この本に書かれていることを素直に読むことが出来た。この本は、鍵山秀三郎氏の「一日一語」と同様に常に手許に置いて読みかえしたい本である。

本の内容は、中国の古典や日本の立派な人々の言葉を集めて解説してある。いくつかを紹介する。

1. 一隅を照らす

「古人言く径寸十枚、これ国宝に非ず。一隅を照らす、これ則ち^{すなわ}ち国宝なり」と

「一燈照隅」（安岡正篤師）一隅を照らすとは、社会のどこにあっても、その立場立場において、なくてはならない人になる。その仕事を通して世のため人のために貢献するという。国も社会も会社も自分の外側にあるもの、向こう側にあるもの、と人はともすれば考えがちである。だが、そうではない。そこに所属する一人ひとりの意識が国の品格を決め、社会の雰囲気を決め、社風を決定する。一人ひとりが国であり、社会であり、会社なのである。

2. 澁刺颯爽（いつも気持ちをさわやかにしておく。いつもさっそうとした気分である）

人間の心とはそれほどきれいなものではない。人間の心は自然と似ている。雑草は放っておいても、またたく間に繁茂する。しかし、美しい花は水を与え、肥料をやり、虫を除け、丹精こめて育てなければ花開かない。人間の心もそれと同じである。放っておくと雑草が生える。心の花を咲かせるためには、絶えず心を見張り、雑草を抜き取らなければならない。

3. 丹精を込める

丹精を込めるとは、まごころを込めるということである。真心を込めて物事を仕上げるとのことである。

4. 霜に打たれた柿の味、辛苦に耐えた人の味

辛苦を味わうことで人に痛みが分かり、思いやりに溢れた滋味を身につける人がいる。だが、辛苦の経験が偏狭さとなり、傲岸不遜、悪どくしたたかになってしまう人もいる。大事なものは辛苦そのものではなく、耐えるというその一語の重さにある。

5. 鳥が選んだ枝、枝が待っていた鳥（陶芸家・河井寛次郎）

「私」と「仕事」、「私」と「会社」、そして「人」との関係もかくありたい。

この他に心に残った言葉は、

○森信三先生「現代の覚者たち」…天からの封書

人はこの世に生まれた瞬間、全員が天から封書をもって生まれてくる。その封書を開いたら、あなたはこういう生き方をしなさい、と書いてある。しかし、せっかく天からもらった封書を一回も開かないまま死んでいく人が多い。この道を行くとは、天からの封書を開くことである。あなたは天からの封書に気づいたろうか。封書を開いた人生を歩んでいるだろうか。

○松下幸之助の会社経営に成功する3つの条件

1. 絶対条件…経営理念を確立すること。経営は50%成功。
2. 必要条件…一人ひとりの能力を最大限に生かす環境をつくること。これができれば経営は80%成功。
3. 附帯条件…戦略、戦術を駆使すること。これを満たせば経営は100%成功。

○言葉が運命を拓く

人物とは言葉である。日頃どういう言葉を口にしているか。どういう言葉で人生を捉え、世界を観ているか。この言葉の量と質が人物を決め、それにふさわしい運命を招来する。運命を拓く言葉の重さを知らなければならない。

○人間力を養う……何が必要か

根本になくなくてはならないのは、「憤」の一字である。物事に出会い、人物に出会い、発憤し、感激し、自己の理想に向かって向上心を燃やしていく。そういうものを根本に持っていない人に、人間力はついてこない。次に大事なものは「志」である。夢と言ってもいい。いかなる志、夢をもっているか。その内容が人間力の大小・厚薄・重軽を決める。第三は与えられた場で全力を尽くすこと。人生の経験をなめ尽くすことと言ってもいい。第四は、その一貫持続であり、すぐれた古今の人物に学ぶことである。その最後に大事なものは素直な心だろう。

以上のことは、この本に書かれた一部であるが、良い本に出会い、良い人との出会いがその人を成長させてくれると、つくづく思った。私が成長しないと、私達の夢は実現しません。もっともっと勉強しなくては。